



卓話



「2005年～2006年を振り返って」

直前会長 米山昌英会員

前年度の一年を振り返って話をしようということですが、正直言って「黙によろしく説によろしからず」という言葉があるように、一年間、自分達の行ってきたことをあれこれ



説明することは、決して私の本分ではありません。黙って皆さんのご批判を受ける立場ですから、内心忸怩たるものがあります。しかし20年間の積み重ねを正しく次の世代の方々に伝える義務もありますし、委員長がやってきたことを少しでも話をするのも大切かと思ひ、曲げて人情にしたがってお話をさせていただきます。

『新婦騎驢阿家牽』「新婦、驢（ろ）に騎（の）れば阿家（あこ）牽（ひ）く」という禅語があります。新婦が驢馬にのって年寄りの巫子、姑が背をまるめ驢馬をひっぱっているということです。一般的な常識から考えると、若い新婦が驢馬にのり、年寄りが驢馬を引くという姿を見ると常識的にはおかしいと感じます。しかし、禅的にみるとそのような見方もあるし、ちょっと前までは、年寄りが背に乗っていたが、新婦が疲れたので交代してこのような状況となったとも考えられ、様々なものの見方ができます。私はそのようなことこそ大切であると思うのです。自分らのやってきた一年を振り返り、それぞれの見方が皆様にもあるし、私共の足りなかった点多々あったと思います。しかし一つの見方として皆さんがそれぞれの立場で、一生懸命活動して下さったので、会長としても大変居心地がよかったですと考えています。

活動計画としてはR1ستنハマー会長及び古宮ガバナーの掲げるスローガン「超我の奉仕」を当クラブの基本方針とし、四谷はそれに基づいてどのようにしたら魅力のあるクラブにしていけるかということを考えました。「超我の奉仕」については皆さんもご存知のように、サービスが第一、自己が第二ということですが、私は少し仏教的、宗教的な解釈をしています。道元禅師は、『愚人思わくは、利他を先とせば、自らの利、省かれぬべしと。然には非ざるなり、利行は一法なり、あまねく自他を利するなり』と述

べています。愚かな人間は、他人の利益を先にすると自分の利益がなくなってしまうと思うが、実はそうではない。他人の利を先にするのが自分の利になるということである・・・「超我の奉仕」とは結局そこに行き着くと考えます。

前会長より引き継ぎましたとき、21年目を迎え改めて「クラブ創立の原点」に立ち返り、先輩の築いてきたロータリーの伝統や精神をしっかりと次の世代に伝えていくために、まず役員、理事の配分に心を配りました。この一年間、皆さんに自由に意見を言うていただき、お互いが啓蒙しあい、若い人は先輩の話の中から自分なりにそれを会得し、生かして頂くと、様々なものが見えてきたよい理事会を構成できたと自負しております。

もうひとつ大事なことは予算をしっかりと決めるということでした。どこの会社でも経常収入から経常支出を引いたものがプラスになるか、悪くてもプラスマイナスゼロになる予算の組み方をしなくてはなりません。事業計画は、選択と集中により智恵を出し、重点主義でメリハリをつけることができ、ある程度の予算は守れたということをいづれご報告できると思います。

そのような予算という点から出発し、やはり夜間例会は会費が高くなってしまふ為、第五週だけにしました。しかし昼の例会だけでは、コミュニケーションがとりにくいということで、親睦、意思の疎通を図るために、炉辺会合を年間3回とし、必要に応じて「クラブ四谷委員会」を随時開き、会話不足を解消していくことを計画しました。これは正直消化不良となりまして、「クラブ四谷委員会」も開くことが難しく、またそして炉辺会合3回でなく2回で終わり、心残りに感じています。

ほかには新旧会員の融和を心がけ、ささやかでしたが新会員の入会式も心のこもったものを行えました。それから不幸にも前年度4名の会員が亡くなりましたが、一年が経過したとき簡単ですが、「偲ぶ会」を4回実施しました。また「1000回記念例会」も特別例会として1時間の卓話も行えました。さらに例年在籍者の褒章もでき、還暦、古希、喜寿を迎えた会員のお祝いなど、少しばかりの気配り、そういうものを入れたものを例会の中でしてこられたと考えています。

もうひとつ私どもが与えられた大きな課題が青少年の交換留学生の引き受けでした。大塚会長の時から引き継ぐ折、「これだけはしっかりやってほしい」と話を受け、そ

ここでドイツからドロシーが日本にやってきた時も、思い出に残る日本での生活ができるようにしたいと思いました。正直、最初ステイ先が見つからず、家内にも了解を取り、まず自分が引き受ける事に致しました。実際大変な事も多かったですが、自分が留学生を引き受けることで、根岸氏、板橋氏の大変さを「経験というレンズ」を通して初めて理解でき、本当に良かったと思っています。野邊さん・岩野さん宅には随分ご迷惑をおかけしましたが、ドロシーの留学を会員全員の暖かいサポートで成功できたと考えています。

また安田幹事が最も情熱を注いでやってこられた事ですが、21年間受け入れてきた交換留学生の懇親の場として「留学生の集い」が初めて実現しました。これは皆さんからも留学生の皆さんからも喜んでもらったので本当に良かったと思っています。

具体的な委員会の取り組みに関しては各委員会で実に色々良くやっていただきました。特にIT委員会は、当初は下半期よりウェブ上に掲載する予定でしたが、思いのほか早くインターネット上で週報が取れるようになりました。今年度の予算削減のためには大きな事の一つであったと思っています。親睦活動委員会にも限られた予算でたくさんの方の会員ゲストを集めた企画をしていただきました。また、社会奉仕委員会はクラブとして初めて地区から補助金を出していただき、社会奉仕をするという画期的なことを、鯉江氏が中心となって取り組んでいただきました。また国際奉仕でも20周年事業で作ったラオスの学校をケアする為、梶浦氏と鯉江氏が再訪問し、これからの奉仕活動のあり方を模索してきましたので、次年度にきっと新しい活動が開くと思います。

任期中の心残りとしては会員の増強が出来なかった事が挙げられます。私自身、四谷に本拠を置いてないという事

があり、知己が少なく率先してできなかったことが残念です。また退会者として平井氏、林氏、押川氏を出してしまいました。会員の増強に関しては現在西浦会長がご尽力しているため、色々なことが目に見えてきていますので宜しくお願いします。

色々雑駁な話をしましたがキャビネットの皆さんが協力して下さい、とても居心地の良い理事会が出来ました。それはなんといっても一人一人の皆さんが優れており、物事を考えられ、色々な才能をお持ちだったからと思います。カーネギーの墓碑銘に、「自分より優れた者を自分の周りに集める術を知るものここに眠る」と残されていますが、この言葉のように本当にすばらしい方達に囲まれて、ロータリーライフを過ごせたのを誇りに思っています。その中でも私の手足というよりも頭、五肢となってやっていただいた安田幹事には心より感謝しています。過日、話をする機会があり、安田さんが「幹事をして良かった。細かい心配りをさりげなくやるというのが会長、幹事の仕事ですよ」とおっしゃって下さり、私も同感するとともに幹事の名司会ぶり、組み立てる能力、実行力等について、心より感謝して一年を振り返りました。

最後に私は例会が始まる時の挨拶は出来る限り季節感を出し、例会が終わる時の挨拶は卓話者の話から引用してまいりました。20数年前、週刊朝日の名編集長といわれた扇谷正造氏より、「米山さんも年をとり一人前の社会人として仕事をすれば、話をする機会があるだろうから、話の小銭を持っていると良い」というアドバイスを受け、15秒、30秒、3分等で収まる話をメモしてきました。人様が言った事をそのまま披露したのですが、会長を終わるに際して「渋柿の渋そのままの甘さかな」をモットーとしました。いずれにしても未熟不徳一年をお詫び申上げ、ご寛容いただきたいと思っています。